

編集後記

サッカー・アジアカップにおけるジーコ・ジャパンの活躍は、プレイの世界での出来事だとはいえ、勝負というものの奥行きや深さ、勝利を信じ最後までチームが一丸となって闘うことの大切さを教えてくれた。と同時に、中国の観衆の日本チームに対するブーイングは、あらためて歴史の重みを実感させた。その直後の、オリンピック・ギリシャ大会での日本選手の活躍は、史上最多のメダル数の獲得となり、国内を沸かせた。メダル・ラッシュに焦点をあてた日本のマスコミ報道は、世界的なアスリートの交流と平和を願う場でもあるオリンピック大会を、国家間のメダル競争の場であるかのように扱った。とはいえ、かつてのスポーツ報道とは異なり、メダリストたちを、「根性」を糧に孤高の力を発揮する超人としてではなく、身近な苦労話や家族的な逸話を交え、私たちの身近にいるスターやアイドルとして扱った。選手たちも、自らのパフォーマンスで会場を魅了しようとし、彼ら、彼女らは、スタジアムの観衆を「お客さん」とみなし、支えてくれたスタッフや支持者に真摯に感謝した。優れた記録やパフォーマンスが、選手個人に属するのではなく、スタッフや支持者・後援者、観衆とともに創られるものであることを、私たちに実感させた。

今日のスポーツは、国境という国民国家の枠をこえ、グローバルな様相を示している。と同時に、ナショナリズムとも深く結びつき、国や郷土への愛着心を強く喚起する。スポーツが生み出す心情や情緒は、国家＝国民や権利＝義務という堅く狭い枠組みではなく、日常の生活感や嗜好、身体感覚のレベルにおいて私たちをとらえ、否定しようのない共通の感情を無意識のうちに、広範かつ柔軟に培い、グローバルな方向とも、ナショナリズムとも結びつく。激動の渦中にある日本のプロ野球も、そうした動向や機運のなかで、未来を模索することになるのであろう。

スポーツ科学研究室は、そのようなスポーツをめぐる動向を、社会科学の対象として究明してきた。私たちは、研究室の主催する研究会での発表を1つの軸に、研究活動を進めており、その成果が本誌に反映される。2003年度の研究は、昨年度と同様、文部科学省科学研究費補助金をえたプロジェクト研究と重複させながら実施された（研究課題名「スポーツのグローバル化とローカリゼーション」、基礎研究（C）（2）、課題番号 1458021-00、研究代表者 上野卓郎）。本誌のサブタイトルを、「グローバル化とスポーツの諸相」としたのは、そのような理由による。

本誌の刊行とかかわって、もう1つ指摘しておきたいことに、表紙の刷新がある。デザインは天野真由美氏（D+1 STUDIO）にお願いした。複数の図案のなかから、シンプルなものを、私たち、メンバー全員の総意をもって選択した。表紙のデザインは、本誌の新しい顔である。本誌に掲載される諸論考とともに、広く、永く、知られるようになることを期待している。（研究部・高津 勝）

一橋大学 スポーツ 研究

Vol.23

グローバル化とスポーツの諸相

2004年10月1日 発行

編集・発行 一橋大学スポーツ科学研究室

〒186-8601 東京都国立市中 2-1

042-580-8270

www.rdche.hit-u.ac.jp/~sports/
